

山口県宇部地域における泊園書院出身者の 事業活動の一考察

— 渡辺祐策を支えた名望家を中心に —

横 山 俊一郎

A study of the business activities in the Ube area, Yamaguchi Prefecture, includes a look at four Hakuen-Shoin graduates: Hayashi Sensuke, Murata Mashitaro, Kito Kannosuke and Kato Ryokichi; all of whom were men of high repute, who supported the founder of Ube Industries, Ltd., Watanabe Sukesaku.

YOKOYAMA Shunichiro

This paper investigates the business activities and underlying ethics of Hayashi Sensuke, Murata Mashitaro, Kito Kannosuke and Kato Ryokichi, all of whom men of high repute, who supported the founder of Ube Industries, Ltd., Watanabe Sukesaku, to better understand the nature of businessmen who graduated from Hakuen-Shoin, a private academy of Chinese studies. As a result, I found that their business ideas and system were greatly influenced by their fathers and Confucian teachers, who tried to control their greed, pleasure and enjoyment and adapt to the new society, science and civilization after the Meiji Restoration, as the responsibility of rulers.

キーワード：泊園書院 (Hakuen-Shoin)、林仙輔 (Hayashi Sensuke)、村田増太郎 (Murata Mashitaro)、紀藤閑之介 (Kito Kannosuke)、加藤亮吉 (Kato Ryokichi)、名望家 (men of high repute)

はじめに

大阪の泊園書院は近代日本の工業化を支えた多数の実業家を輩出した漢学塾であるが、彼ら実業家を取り上げた研究はほとんど見当たらない。そこで本稿では、近代における泊園書院出身者の事業活動の一事例として、宇部興産創業者である渡辺祐策^{すけさく}を支えた名望家、すなわち林仙輔、村田増太郎^{ましたろう}、紀藤閑之介、加藤亮吉を取り上げ、泊園書院出身実業家の性格を知る手掛かりとしたい¹⁾。

明治期において彼らが泊園書院で学んだことは、彼らの事蹟が記された伝記類を見ても、林仙輔を除き、その事実を確認することができない²⁾。しかし、明治38(1905)年初頭刊行とされる『第拾五六回泊園同窓會誌』〔LH2/丙96-15/16〕(編集兼発行者は不明) 附載の門人名簿『登門録』には村田増太郎、紀藤閑之介、加藤亮吉の姓名が確かに記されている³⁾。なお、彼らのうち加藤については、当時の院主藤澤南岳の「還暦祝賀會」(1902年)に「門人列席者」として参加していた⁴⁾。後述するように当時大阪にて弁護士を開業していた彼は、退塾後も泊園書院との関わりを維持しようと努めていたのである。

一方、彼らの就学状況については、塾生の毎月の成績表であった『生員勤惰表(勤惰月旦評)』〔LH2/丙101-1~101-8〕によって推測することができる⁵⁾。

1) 『日本全国商工人名録③』明治31年(渋谷隆一編『明治期日本全国資産家地主資料集成Ⅲ』柏書房、1984年、212頁)によると、地価額だけで見れば、紀藤(閑之介)は山口県厚狭郡内で一番大きい地主であった。

2) ただし、詳細な考証にもとづいて宇部の工業化と福原士族集団との関係を『炭山の王国——渡辺祐策とその時代』(宇部日報社、2007年)として明らかにした堀雅昭氏は、その講演において「大阪には藤沢南学という漢学者がいて、泊園書院という私塾を開いておりました。…ここで林仙輔、村田増太郎、紀藤閑之介といった旧福原家臣たちが学んでいたようです」(堀雅昭「自由民権と渡邊祐策」宇部地方史研究会編『宇部地方史研究』第42号、宇部地方史研究会、2014年、37頁)と述べている。

3) 『登門録』のうち「山口県厚狭郡上宇部村」(村田増太郎)、「山口県厚狭郡河上村」(紀藤閑之助)、「山口県吉敷郡床浪浦」(加藤亮吉)。林仙輔の姓名については『登門録』に記載されていないが、後述する『生員勤惰表(勤惰月旦評)』には、「林仙輔」(もしくは「林仙」と)の表記が見られるので、何らかの理由で『登門録』から洩れてしまったのだろう。なお、『登門録』は吾妻重二編『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1——』(関西大学出版部、2010年)に影印されている(447-460頁)。LH2以下は関西大学総合図書館の請求記号である。

4) 「還暦祝賀會」については、明治36(1903)年刊行の『第拾四回泊園同窓會誌』〔LH2/丙96-14〕(編集兼発行者は篠田栗夫)を参照。

5) 『生員勤惰表(勤惰月旦評)』は全八冊の藤澤南岳筆による大和綴じの横本であり、罫線によって上下四段に分けられ、等級と学生の姓名が記載されたものである。等級は二等上から九等下まで分けられ、三等以上が高等とされた。なお、同書の二冊目〔明治12(1879)年1月~明治15(1882)年12月〕と三冊目〔明

それによると、まず林は、明治14（1881）年12月に八等下生として記されて以降、同様の記載が明治15（1882）年3月まで隔月でなされている⁶⁾。その後、同年6月に八等上生として記されるが、同年7月と同年8月は成績表それ自体が欠落しているため、その間の就学状況は不明である。その後、再び同年9月に八等上生として記されて以降、同年翌月を除き、同様の記載が同年12月まで隔月でなされている。以上の表記は、明治14（1881）年12月の「林仙輔」を除き、全て「林仙」であった。

次に村田の場合、明治17（1884）年1月に六等下生として記されて以降、同様の記載が同年4月まで隔月でなされている。以上の表記は、全て「村田増」であった。最後に紀藤と加藤は、明治17（1884）年11月に揃って八等下生として記されているだけである。以上の表記は、「紀藤閑」と「加藤亮」であった。

本稿では、上記の就学環境にあった林、村田、紀藤、加藤の略歴および渡辺祐策との共同事業を明らかにしつつ、渡辺を含めた彼らの活動に対して思想と制度の両面で影響を与え続けたと考えられる彼らの父親の言動に注目する。

具体的には、加藤と紀藤の父親である藤田義輔と紀藤宗介について、渡辺翁文化協会発行の文化啓蒙誌『大字部』第2号〔昭和12（1937）年6月10日付〕における座談会インタビュー記事と宇部市立図書館付設郷土資料館の紀藤家文書二に所蔵された『草湖藤田先生遺稿』第2巻（田中喜市、1933年）を用いて分析したい。

以上の作業を通して林、村田、紀藤、加藤の四者の事業活動の背後にある倫理性如何という問題について幾らか接近することを試みる。

1 泊園書院出身者の略歴

本章では、山口県宇部地域における泊園書院出身者であった林仙輔、村田増太郎、紀藤閑之介、加藤亮吉の略歴について、彼らの家系と修学に加えて、若干の事業（もしくは役職）を見ていきたい。彼らのその他多くの事業（もしくは役職）と父親については、第2章および第3章で述べる。

(1) 林仙輔

名は仙輔、号芝山は厚狭郡中宇部村にて長州藩永代家老福原家の家臣林順清の次男として文

治17（1884）年1月～明治19（1886）年12月]の間の成績表は欠落しているため、林の退塾時期および村田の入塾時期は推定することができない。

6) その間、明治15（1882）年2月については「不勤過一月」の印が付されている。

久3（1863）年8月18日に生まれた⁷⁾。まさに、会津・薩摩両藩中心の公武合体派が長州藩を中心とする尊攘派を京都から追放した事件の当日であった。同年11月には、七卿のうち東久世、錦小路の両公卿が福原家の懇請を容れて宇部に来訪し、林家の邸宅に宿したという。

林家は代々医者を勤めた家柄で、初代林道順は藩命によって長崎で蘭法医学を研究したのち、藩主から拝領した屋敷にて開業し大いに名声を博した。二代、三代、四代と同じく道順と名乗ったが、ことごとく蘭医として令名があり、近郷はもちろん下関方面まで往診したらしい。五代順清に至って農業に従事し、六代はすなわち林（仙輔）である。

林は明治6（1873）年学制発布後に設置された小学校で学び始め、旧主福原芳山が大阪裁判所の判事として明治11（1878）年から同14（1881）年まで在勤した際には、芳山の庇護を受けて大阪で中等教育を受けた⁸⁾。この間、明治14（1881）年泊園書院に入門する（先述）。明治17（1884）年学成って宇部に帰ったが、泊園書院を辞する時、南岳は訓戒の語を書いて与えたりしい。

明治19（1886）年石炭鉱区の管理と宇部村民の福利を目的として結成された宇部共同義会の幹事となったのち、明治22（1889）年宇部共同義会の援助によって石炭採掘で使用する蒸気ポンプのリース会社である興産会社（社長：藤本晋一）を創立し、その副社長に就任する。

明治25（1892）年県会議員に選ばれたのち、明治30（1897）年5月から明治31（1898）年6月まで宇部村長〔第三代〕を勤め、明治35（1902）年には宇部村初の衆議院議員として当選した。また、明治38（1905）年宇部共同義会の会長〔第三代〕に選ばれ、防長農工銀行、宇部銀行、福山銀行、福川銀行、宇部軽便鉄道、宇部電気など各社の重役も歴任する。

その後、大正15（1926）年4月から昭和3（1928）年6月まで宇部市長〔第二代〕を勤め、

7) 林家と仙輔については、堀雅昭『炭山の王国——渡辺祐策とその時代——』（宇部日報社、2007年）のほか、松田元介編『御大典記念防長人士發展鑑』（山都房、1932年）380頁、大橋良造編『山口縣史』下巻（山口縣史編纂所、1934年）213,214頁、財団法人宇部共同義会編『宇部共同義会五十年誌』（財団法人宇部共同義会、1936年）の八「歴代役員」、渡辺翁記念文化協会編『復刻宇部先輩列伝』〔『大宇部』第34号・昭和15（1940）年7月1日付〕（宇部地方史研究会、1991年）100-102頁、山口県教育会編『山口県百科事典』（大和書房、1982年）641頁、歴代知事編纂会編『日本の歴代市長』第3巻（歴代知事編纂会、1985年）163頁を参照。

8) 福原芳山（1847～1882）は長州藩永代家老・宇部領主。栗屋親陸の二男として生まれた。初め国司親通の養子となり、のち福原越後の養子となる。慶応元（1865）年福原家の家督を継ぎ、直ちに干城隊総督に任ぜられ、姓を鈴尾と改めた。慶応2（1866）年幕長戦では芸州亀尾川口の総指揮をとった。洋学修業のため長崎を経て慶応3（1867）年英国に留学し、明治元（1868）年福原姓に復し、明治7（1874）年に帰朝した。同年司法省に入って明治11（1878）年判事となり、大阪裁判所に勤め明治14（1881）年大審院詰となったが、間もなく病死した（日本歴史学会編『明治維新人名辞典』、吉川弘文館、2006年、846頁）。

昭和10（1935）年1月30日没した。なお、渡辺祐策が林の人格に敬意を払っていたことは、渡辺の伝記の中で詳細に書かれている。

(2) 村田増太郎

村田は厚狭郡上宇部村にて長州藩永代家老福原家の家臣村田勇太の息子として文久3（1863）年に生まれた⁹⁾。豊前国中津の私塾で学んだのち、明治15（1882）年頃、藤田義輔が主宰する三計舎（同門は藤田豊、紀藤織文）に入門する¹⁰⁾。また、岩国の東澤瀉塾（同門は渡辺祐策、紀藤閑之介、藤本閑作、加藤亮吉）に学んだ¹¹⁾。この間、明治17（1884）年頃泊園書院に入門する（先述）。

上京して和仏法律学校で学んだのち、帰郷したのは明治21（1888）年もしくは明治22（1889）年の頃であった。明治23（1890）年村会議員となったが、この年日本に初めて国会が開かれ、山口県第一区から三田尻の光妙寺三郎を代議士として第一議会に送るため、その運動員として東奔西走する¹²⁾。同年には宇部に青少年の会合が創められたが、村田はその監督に推され、その

9) 村田家と増太郎については、堀雅昭『炭山の王国——渡辺祐策とその時代——』（宇部日報社、2007年）のほか、松田元介編『御大典記念防長人士發展鑑』（山都房、1932年）412頁、財団法人宇部共同義会編『宇部共同義会五十年誌』（財団法人宇部共同義会、1936年）の八「歴代役員」、戸島昭「宇部達聴会について（一）」（宇部地方史研究会編『宇部地方史研究』第2号、宇部地方史研究会、1973年）の歴代会長とその在任期間を示した表、渡辺翁記念文化協会編『復刻宇部先輩列伝』（『大宇部』第59号・昭和15（1940）年8月1日付）（宇部地方史研究会、1991年）103-105頁、財団法人日本経営史研究所編『小野田セメント百年史』（小野田セメント株式会社、1981年）134頁を参照。

10) 藤田豊（1865～没年未詳）は宇部の川上村の地主の家に生まれ、明治24（1891年）には宇部の潟炭鉱を経営する鉱主の一人として活躍した。その後、福岡県田川郡後藤寺の蔵内炭鉱で活躍し、明治41（1908）年当地の視察に訪れた渡辺祐策の要請で帰郷する。明治44（1911）年には平民初の宇部村長〔第八代〕となった。大正6（1917）年に設立された宇部紡織所の取締役となったほか、市会議員や県会議員なども勤めた（堀雅昭『炭山の王国——渡辺祐策とその時代——』、宇部日報社、2007年）。

紀藤織文（1858～1947）は長州藩の永代家老福原家の家臣の家に生まれる。長じて和仏法律学校に入学して法律学を修め、郷土の民政に参与し、しばしば村、郡、県の各議員に選ばれ、地方政治に貢献するところ少なくなかった。一転して実業が盛んとなった宇部村に殖産興業に必要な銀行がないことに憤慨し、大正元（1912）年株式会社宇部銀行の設立を計り、その取締役頭取に就任する。他にも一般公共の事業に尽くすこと多大であり、また文事の趣味あって詩歌を能くし凌雲の号があった（吉田祥明『増補近世防長人名辞典』、マツノ書店、1976年、99-100頁）。

11) 藤本閑作（1867～1936）は実業家。宇部村で明治41（1908）年東見初炭鉱を創業し、昭和10（1935）年まで頭取となる（のち宇部興産と合併）。明治45（1912）年宇部銀行創立に際し取締役、すぐ常務に昇進し、昭和3（1928）年頭取となった（のち山口銀行と合併）。また宇部村会議員から大正7（1918）年貴族院議員を一期勤め、大正11（1922）年宇部市制施行後は市会議員に選ばれ政界でも活躍、宇部曹達設立に努力し、宇部財界の巨頭であった（山口県教育会編『山口県百科事典』、大和書房、1982年、670頁）。

12) 光妙寺三郎（1849～1893）は三田尻の光妙寺半雲の第三子。青年期に家を出でて長州藩の鴻城軍に身を

会名を養智会と命名したという。

その後、明治26（1893）年宇部共同義会の第二部長、すなわち石炭部長に就任したが、法律家に似合わず鉱区の図面等を作成し、紛糾を重ねた鉱区問題を解決するなど成功を収めたらしい。明治27（1894）年には県会議員に選ばれ、日清戦争時の県政に多くの貢献をする。

のちに宇部興産社長となる中安閑一の父中安周太郎らが上宇部村に王子炭坑を採掘し、明治29（1896）年炭坑から海岸までの間に小鉄道を敷設して小機関車を走らせ、石炭を輸送することを始めたが、上京して政府の認可を得て帰ったのは村田であった。これは機関車の故障によって中止するに至ったが、山口県における鉄道敷設の嚆矢となる。

小野田セメント製造株式会社では、明治34（1901）年11月に退任した笠井順八社長（同社の創業者）の後、取締役社長の職を空席とし、その経営の中心は、同年同月に専務取締役役に就任した河北勘七と同じく取締役に就任した村田（明治36年より常務取締役）に移った。この両者の就任には債権者である毛利家の意向が強く影響していたという¹³⁾。

明治39（1906）年6月から明治41（1908）年7月まで宇部村長〔第六代〕を勤め、明治45（1912）年には宇部村民の政治団体である宇部達聴会の会長〔第八代〕に挙げられ、宇部軽便鉄道の社長を兼ねていたが、大正4（1915）年2月20日に没した。なお、明治25（1892）年生まれの名男信夫は農業を営む傍ら宇部紡績、宇部鉄道株式会社の監査役にして多額納税者に列する。

投じ各所で従軍した。維新後は井上馨に随って長崎に赴き仏語を修める。明治3（1870）年毛利家より抜擢されてフランスに留学し、法律学士の称号を得て明治11（1878）年に帰朝した。太政官権少書記官など歴任した後に衆議院議員に当選したが、明治26（1893）年に没する。能く詩を作り可堂、水賓、夢龍居士、奚疑士などの号があった（吉田祥朔『増補近世防長人名辞典』、マツノ書店、1976年、111頁）。

13) 笠井順八（1835～1919）は実業家。長州藩御船手組の有田甚平の三男として生まれた。のち長州藩士笠井英之進の養子となり、財政関係の役などに就く。明治元（1868）年会計局庶務方助役、明治6（1873）年山口県勧業局主任となったが、明治10（1877）年以後は県の役職を辞して旧藩士族の授産事業に尽力し、明治16（1883）年セメント工場を厚狭郡の小野田新開作に建設する。旧士族を多く従業員に採用して福利厚生を図った。明治34（1901）年まで社長の職にあったが、事業は年とともに栄え、現在の小野田市発展の支柱となった（山口県教育会編『山口県百科事典』、大和書房、1982年、153頁）。

河北勘七（1864～1936）は河北一の長子。明治の初め上京して法律を修め、明治20（1887）年ベルギーのブラッセル大学に留学した。政治学を専攻し帰朝後に衆議院議員に当選する。在職中に官有原野の下げ戻しに尽力し、三国干渉問題が起るや対外硬を主張した。その後日本遠洋漁業会社を創めノルウェー式捕鯨業を開始する。また小野田セメント会社の社長、百十銀行監査役などとなり、その事業の整理拡張に尽力した（吉田祥朔『増補近世防長人名辞典』、マツノ書店、1976年、80頁）。

(3) 紀藤閑之介

名は閑之介、号六一居士は厚狭郡川上村にて長州藩永代家老福原家の家臣紀藤宗介の長男として明治2（1869）年11月7日に生まれた¹⁴⁾。

紀藤家の祖は、慶安事件の首謀者である由井正雪に与した初代紀藤勝右衛門が宇部に逃れたことが始まりとされ、二代宗興は当地にて医者を開業した。三代権兵衛は他家からの養嗣子であったが、経理に明るい人物で岐波方面の水田の買収を図ったという。紀藤家は藩財政の窮乏に際して私財を提供したこともあったらしく、紀藤（閑之介）に至るまで十代を算する。

紀藤は幼い頃、岩国の東澤瀉塾（同門は渡辺祐策、村田増太郎、藤本閑作、加藤亮吉）に学んだ。渡辺祐策の入塾は自分より四、五年前で、藤本閑作の入塾は自分より一年後だったという。この間、明治17（1884）年泊園書院に入門する（先述）。翌年、大阪の大学分校の予科に入学したが、在学中に京都に移転し、明治26（1893）年第三高等中学校を卒業する。

明治28（1895）年から村会議員を勤め始め、明治34（1901）年宇部達聴会の会長〔第五代〕に当選した。その後、明治38（1905）年宇部共同義会の会長〔第四代〕に就任する。明治45（1912）年には宇部村初の新聞『宇部時報』を創刊した。

大正元（1912）年株式会社宇部銀行の取締役役に就任し、大正2（1913）年財団法人宇部共同義会と改称するのに伴い同会長に就任した。大正11（1922）年市制移行に伴い宇部市会議員に当選し、同年には宇部電気株式会社の取締役役に就任する。大正15（1926）年になると宇部市会議長に当選した。

昭和2（1927）年宇部達聴会の会長〔第十二代〕に当選したのち、昭和3（1928）年7月から昭和4（1929）年4月まで宇部市長〔第三代〕を勤めた。その後、昭和5（1930）年宇部達聴会の会長〔第十五代〕に当選したのち、昭和10（1935）年12月から昭和13（1938）年7月まで再び宇部市長〔第六代〕を勤める。

他にも、宇部鉄道の電化、創立宇部中学校、宇部工業学校の創立に努力し、晩年は宇部郷土

14) 紀藤家と閑之介については、『米寿紀藤閑之介翁』（紀藤閑之介翁米寿祝賀記念会、1957年）と堀雅昭『炭山の王国——渡辺祐策とその時代——』（宇部日報社、2007年）のほか、井関九郎撰『現代防長人物史』人（發展社、1917年）406頁、大橋良造編『山口縣史』下巻（山口縣史編纂所、1934年）561-562頁、財団法人宇部共同義会編『宇部共同義会五十年誌』（財団法人宇部共同義会、1936年）の八「歴代役員」、戸島昭「宇部達聴会について（一）」（宇部地方史研究会編『宇部地方史研究』第2号、宇部地方史研究会、1973年）の歴代会長とその在任期間を示した表、山口県教育会編『山口県百科事典』（大和書房、1982年）215頁、歴代知事編纂会編『日本の歴代市長』第3巻（歴代知事編纂会、1985年）164-165頁、中西輝磨『昭和山口県人物誌』（マツノ書店、1990年）112頁、百年史編纂委員会編『宇部興産創業百年史』（宇部興産株式会社、1998年）133頁を参照。

文化会長として文化の保存育成に尽力し、昭和36（1961）年9月28日に没した。和漢の造詣深く、事業心に富み理財の学に通じていたという。

なお、昭和17（1942）年沖ノ山炭鉱、宇部窒素工業、宇部セメント製造、宇部鉄工所の四社が合併して宇部興産株式会社が生じたが、その新たな社名の命名者は紀藤であった。先述した興産会社（社長：藤本晋一、副社長：林仙輔）を意識して名づけたという。

(4) 加藤亮吉

名は亮吉、号松荘は厚狭郡沖宇部村にて長州藩永代家老福原家の家臣藤田義輔の三男として明治3（1870）年1月9日に生まれ、明治15（1882）年に吉敷郡西岐波村の旧家で代々庄屋を勤めた加藤家の養嗣子となった¹⁵⁾。

加藤家の祖は、元禄年間（1688～1704）に米屋と称して米穀商を営み、大型帆船数隻を所有して米穀の移出入とともに回漕業を兼ねて財をなしたという。初代長左衛門、二代喜左衛門、三代市兵衛、四代市右衛門と継いでいき、五代は他家から養嗣子が入って市右衛門を襲名した。五代市右衛門の当時、天保の飢饉があって村民の多くは食料と仕事がなく飢えに苦しんでいたが、彼はこの救済のためみずからの邸宅の建築を行い、大勢の入夫を雇入れて佐波郡中関から建築材料を運搬させたらしい。

六代仙吉は文政年間（1818～1830）に庄屋を勤め非常な徳望家であったが、のち長州藩永代家老福原家に召出されて士分となった。七卿落ちの際、みずからの邸宅が錦小路、東久世の両公卿の宿泊所に充てられたが、海岸に面して眺望に富む分家の加藤惣兵衛宅に移し、真心を込めて歓待したという。七代憲助は早くから篤学の士として知られていたが、奇兵隊に参加して討死した。八代はすなわち加藤（亮吉）である。

加藤は岩国の東澤瀉塾（同門は渡辺祐策、村田増太郎、紀藤閑之介、藤本閑作）で学ぶ。この間、明治17（1884）年泊園書院に入門する（先述）。大阪府立中学校をへて明治28（1895）年帝国大学法科大学を卒業した。明治30（1897）年東京地方裁判所の判事となったが間もなく退職、明治32（1899）年大阪にて弁護士を開業し、明治43（1910）年一身上の都合により帰郷する。

大正2（1913）年から西岐波村長に挙げられること四期に及び、大正3（1914）年からは産

15) 加藤家と亮吉については、堀雅昭『炭山の王国——渡辺祐策とその時代——』（宇部日報社、2007年）のほか、井関九郎撰『現代防長人物史』地（発展社、1917年）11頁、松田元介編『御大典記念防長人士發展鑑』（山都房、1932年）109頁、大橋良造編『山口縣史』下巻（山口縣史編纂所、1934年）223-224頁、税田古處『郷土發達史と人物及家』（九州姓氏調査会郷土研究部、1940年）143頁を参照。

業組合長としても十六年間尽力した。村会議員としては七期に及んで重きをなし、大正3（1914）年から引き続いて村農会長の職にもあり、かつ郡農会長も十余年に涉ったという。

とりわけ二百年来混乱し続けてきた共有林の分割を解決するため、古来より伝統的に対立してきた部落間の感情融和に奔走し、ついに在来の感情を捨てて円満に解決したことは特筆すべきものがあつた。性格は謹厳の中に温味があり風采は堂々として漢籍にも造詣が深かつたらしい。没年は未詳である。

2 渡辺祐策との共同事業

本章では、林仙輔、村田増太郎、紀藤閑之介、加藤亮吉のその他多くの事業（もしくは役職）を確認するに当たり、宇部興産の母体となつた四社、すなわち沖ノ山炭鉱、宇部窒素工業、宇部セメント製造、宇部新川鉄工所を創立し、いずれもその代表者となつた渡辺祐策の社会的活動（政治的、経済的、文化的活動の全て）に注目していきたい。

なぜなら、渡辺を含む彼ら福原士族集団は、同じ思想と制度の下に一致して行動していたと見られ、この彼らの特性こそが宇部の工業化ないしは都市化を促進したと考えられるからである。以下は、渡辺の主な社会的活動とそれに関係した泊園書院出身者を時系列にまとめたものである。

渡辺祐策の主な社会的活動とそれに関係した泊園書院出身者

①明治28（1895）年
渡辺は宇部企業合資鉄工業組合を立ち上げる。林仙輔、国吉明信、村田増太郎らは株主となってこれを支える。
②明治30（1897）年
渡辺は沖ノ山炭鉱を立ち上げる。藤本閑作、紀藤織文、国吉明信、村田増太郎らが株主となってこれを支える。
村田増太郎が新川丸同業組合を立ち上げるに際し、渡辺はこれを援助する。発起人には村田や渡辺をはじめ、林仙輔、藤田豊らが加わつた。
③明治31（1898）年
一致会の会合が林仙輔の邸宅で開かれ、林と渡辺のほか、紀藤織文、紀藤閑之介、村田増太郎らが集まる。この席で、宇部警察署の創設に当たって宇部共同義会から資金援助することが決まつた。
渡辺は林仙輔、紀藤織文、紀藤閑之介、村田増太郎、藤田豊らと会合を開き、厚狭郡役所などで宇部郵便局設置の集中的な交渉を行うことを申し合わせた。
④明治37（1904）年
一致会の会議が林仙輔の自宅で開かれ、林と渡辺のほか、紀藤織文、紀藤閑之介、藤田豊らが集まり、話し合いの末、宇部達聰会の政友会からの脱会が決まる。

⑤明治39（1906）年
渡辺は厚東川架橋組合を立ち上げる。村田増太郎や林仙輔らと重役に収まり、架橋に向けて指揮をとった。
⑥明治42（1909）年
渡辺は村田増太郎と相談したのち宇部電気株式会社を立ち上げる。渡辺は社長に就任し、村田、林仙輔らは取締役に選ばれ、監査役として藤本閑作らが選出された。
⑦明治44（1911）年
宇部軽便鉄道株式会社の創立総会が開かれ、渡辺は社長に推されたが任務多忙の理由で辞退した。その結果、村田増太郎が社長に収まり、渡辺は取締役に就いた。
⑧大正3（1914）年
宇部新川鉄工所の創立総会が開かれ、この席で渡辺は理事長に就任し、理事として藤本閑作らが選出される。監事は村田増太郎らが当選した。
渡辺は宇部村の最有力者紀藤閑之介を宇部新川鉄工所の付属学校となる宇部徒弟学校の共同設立者（校主）として担ぎ出し、文部省に許可させたのち、これを開校する。
⑨大正6（1917）年
渡辺は宇部紡織所（取締役に藤田豊、監査役に村田信夫が就任）を創立するに際し、その事前に紀藤閑之介に宇部に紡績工場を作ったらどうだろうかかと相談する。
⑩大正12（1923）年
渡辺は宇部セメント製造を立ち上げる。創立委員として渡辺のほか、藤本閑作、紀藤閑之介らが選定された。
⑪大正13（1924）年
宇部文芸協会は渡辺のほか、藤本閑作、林仙輔、紀藤閑之介らをメンバーとして発足する。
⑫昭和8（1933）年
宇部窒素工業株式会社の創立総会を開かれ、渡辺は社長に就任する。加藤亮吉らが監査役になった。堀雅昭『炭山の王国——渡辺祐策とその時代——』（宇部日報社、2007年）より筆者作成。泊園書院出身者については、その姓名に網がけを施した。なお、本稿に関わる人物は泊園書院出身者でなくとも取り上げた。

このように、宇部興産の母体となった四社のみならず、海運、電力、鉄道、紡績各社の創立、そして警察署、郵便局、橋梁、学校の設置、さらには文化機関の創設から政友会との連携解消に至るまで、福原士族集団の一致した行動が見られる。

こうした彼らの共同事業を支えていたのは、上表に示したように、①宇部共同義会〔明治19（1886）年創立：宇部村の石炭鉱区管理（第二部）の利益を同村の公益事業（第一部）に還元する団体〕、②一致会〔明治20（1887）年創立：宇部村政の研究機関〕、③宇部達聰会〔明治21（1888）年創立：宇部村民の政治団体〕と呼称される一連の組織ないしは制度であった。

後述するように、紀藤の父紀藤宗介は①の創立時に会長、③の創立時に副会長に、加藤の父藤田義輔は①の創立時に副会長、③の創立時に会長に就任している。また、藤田義輔は②の創

立時に国吉明信と藤本晋一とともに会長の林に助言する顧問格となっている¹⁶⁾。

他にも、藤田義輔ら②の顧問格が中心となった趣味や教養を高めるための勉強会、すなわち有終会に林と渡辺が参加し、同じく林と渡辺が紀藤宗介から和歌の指導を受け、先述したように、村田が藤田義輔の三計舎で学ぶなど、宇部の工業化を推進した彼ら福原土族集団の背後には紀藤宗介と村田義輔の影が見られる。なお、紀藤宗介の妹リカが藤田義輔に嫁していたので、二人は義兄弟でもあった¹⁷⁾。

3 藤田義輔の生涯と教養

本章では、泊園書院出身者である加藤亮吉の父であり、草創期における宇部共同義会、一致会、宇部達聰会を率いた藤田義輔の生涯と教養を見ていきたい。主な史料としては、渡辺翁文化協会発行の文化啓蒙誌『大宇部』第2号〔昭和12（1937）年6月10日付〕における座談会インタビュー記事を用いた。

この記事は、加藤を含む計13名が出席した座談会でのインタビューをもとに作成されたものであり、『宇部郷土史を語る』という見出しの中で「藤田草湖先生に就て」というテーマが語られている¹⁸⁾。本稿では、藤田義輔に関する情報をより多く提供した人物として、加藤のほか、藤田義輔の門人であった紀藤織文（宗介の弟、閑之介の叔父）と藤田豊のインタビューを取り上げたい。

(1) 藤田義輔の略歴

号草湖、名は恭、通称義輔は天保3（1832）年11月5日に生まれた¹⁹⁾。十五、六歳頃から福原

16) 以下の林・渡辺に対する紀藤宗介・藤田義輔の影響関係については、堀雅昭『炭山の王国——渡辺祐策とその時代——』（宇部日報社、2007年）の第1章「沖ノ山炭鉱前史」における第8節「一致会の誕生」、第10節「英語塾と有終会」、第12節「村会議員と歌の道」、渡辺翁記念文化協会編『復刻宇部先輩列伝』〔『大宇部』第34号・昭和15（1940）年7月1日付〕（宇部地方史研究会、1991年）100-102頁の林仙輔の伝記を参照。

17) 紀藤宗介・藤田義輔の親族関係については、堀雅昭『炭山の王国——渡辺祐策とその時代——』（宇部日報社、2007年）42頁。

18) 出席者を五十音順に並べると、加藤亮吉、紀藤織文、国吉省三、杉谷敏一、田中喜市、滝原礼輔、俵田明、藤田豊、牧三平治、松谷辰蔵、松野政之、山田亀之介、弓削勝達の計13名であった。このうち俵田明と国吉省三の両者は途中退席したという。

19) 藤田義輔については、堀雅昭『炭山の王国——渡辺祐策とその時代——』（宇部日報社、2007年）のほか、渡辺翁記念文化協会編『復刻宇部先輩列伝』〔『大宇部』第19号・昭和13（1938）年11月10日付〕（宇部地方史研究会、1991年）68、69頁、宇部市立図書館付設資料館編『宇部村誌』（宇部市立図書館、1981年）80頁を参照。

親俊の小姓となり、早くから佐々木向陽が主宰する菁莪堂に学び、間もなく佐波郡右田の大田稲香の私塾や筑前国の亀井昭陽の私塾に入門する²⁰⁾。

帰郷した後は再び福原家の側近として仕え、元治元（1864）年福原越後とともに禁門の変に従軍し、慶応2（1866）年には芸州口において、いわゆる四境戦争に参加した²¹⁾。それ以前の嘉永3（1850）年には、藤本晋一の父藤本保らと萩の明倫館で新式銃の使い方を学び、宇部に戻ってその使用方法を伝えたという。

維新後になると地元で小学校が設けられた際、萩から教師を迎えるまで、一時的に首席教員となって生徒を教えたが、その頃にはみずから三計舎という私塾（門生は村田増太郎、藤田豊、紀藤織文）を開いて少数の生徒に漢学を教授した。

香港留学帰りの藤本晋一が松方デフレの影響の解決策として、採炭の利益を個人のものとして宇部村全体の財産とするシステム作りを提案したが、そのアイデアを国吉明信、紀藤宗介らと語り、明治19（1886）年に宇部共同義会（会長：紀藤宗介、副会長：藤田義輔）を創設する²²⁾。また明治21（1888）年旧福原領の宇部五カ村の在籍者全てを会員とし、各村の代表議員で話し

20) 佐々木向陽（1801～1863）は長崎の通詞直木家の次男。長じて父とともに肥後熊本に赴き、藩校時習館教授辛島塩井の門に入って朱子学を研修し、さらに二十歳の頃、京摂及び江戸に遊び、碩学名家を訪ねて学識を広めた。その後、周防国吉敷郡の江口牛鳴の知遇を得てこの地に留まり、郷党師弟に文学を教え、また宇部領主福原氏の郷学晩成堂に講説し、青年子弟を教導した。福原氏は弘化2（1845）年廃家の佐々木家を向陽に継ぎ興させて儒臣とし、郷校晩成堂（のち菁莪堂、さらに維新館と改称）学頭に任じ、領内子弟の教育を委ねた（笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下、吉川弘文館、1982年、1315頁）。

大田稲香（1810～1866）は周防国佐波郡勝間村の大田秀橘の子。文政10（1827）年豊後国の広瀬淡窓の門に入って儒学を学び、ついで天保年間（1830～1844）に長崎の高島秋帆に就いて西洋砲術を修め、江戸徳丸原での砲演に参加した。帰郷して右田毛利氏に仕えて教授となり、建議して嘉永3（1850）年学文堂を設け、学制を改め儒学及び砲術を教導する。幕府の征長軍を迎え、大いに活躍して大勝利を立てた（笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下、吉川弘文館、1982年、1306頁）。

21) 福原越後（1815～1864）は長州藩永代家老・宇部領主。徳山藩主毛利広鎮の六男として生まれた。初め佐世親長の養子となり、ついで藩命により福原親俊の跡を継ぐ。元治元（1864）年江戸に行くと呼んで手兵を率い伏見に行き、君冤を訴え嘆願書を伝奏勤修寺家に呈出したが、禁門の変に戦って傷を蒙って退き、藩兵の帰国を決定して宇部に帰着した。藩政権は恭順派に握られ、益田・国司両家老とともに徳山藩へ御預けとなり、山木伊三郎宅に幽閉され、のち岩国の竜護寺に移され、翌日幕府への謝罪のためとして切腹させられた（日本歴史学会編『明治維新人名辞典』、吉川弘文館、2006年、845-846頁）。

22) 国吉明信（1843～1906）は長州藩永代家老福原家の家臣国吉篤信の子。父篤信は禁門の変に従軍した剣士で窮理の学にも趣味があった。明信は少年時代に菁莪堂で漢籍を学んだのち、文久3（1863）年福原領内の壮士を募って軍事集団である義烈団を組織した。維新後の明治5（1872）年には父とともに捕鯨の目的で北海道に渡航したが、失敗に終わった。明治12（1879）年もしくは明治13（1880）年の頃、上宇部村のほか四カ村の戸長となり、県会議員にも当選した（渡辺翁記念文化協会編『復刻宇部先輩列伝』〔『大字部』第37号・昭和14（1939）年9月1日付〕、宇部地方史研究会、1991年、85、86頁）。

合って村民一致の決議を行う宇部達聰会（会長：藤田義輔、副会長：紀藤宗介）を創設し、みずから漢文調の趣意書を読み上げた。しかし一方でこの草稿は藤本晋一が書いたものであったらしい²³⁾。

宇部共同義会、宇部達聰会の創設のほか郡治に参加し県会議員も勤めたが、明治42（1909）年4月7日没した。詩文と書画を愛したのは言うまでもなく、園芸、活花、義太夫にも通じていたという。

(2) 三計舎の開設と漢文の学習熱

まず、維新期の藤田義輔の活動に関する質問とその返答を見ていきたい。ここでとりわけ注目すべきは、藤田義輔は学者レベルの教養を持ちながら、福原士族集団の内部では当初学者とは見なされていなかった点である。

〔加藤亮吉①：父の思い出はあるかとの質問に対して〕

維新になってからは、小学校を建てても先生がゐないので、萩から先生が来られる迄一時父が首席になって教へたこともあり、その頃藤田さん達が、漢文を習ひたいといふお話で三計舎といふ塾を作って、暫く生徒を教へてゐましたが、生徒は殖えて来るし、自分は老年に近いので、一年か一年半で塾を解いてしまって、それから後は、宇部の事情に就ては紀藤宗介さん、藤本晋一さんといふやうなお方と、提携して、時勢につれてやったので、別に父がそれを考へるといふことはありません。紀藤さんなり、その他の相談役になって、仕事をしたといふだけであります。

〔藤田豊①：三計舎はどういう所かとの質問に対して〕

初めは塾生も、極く少しばかりで、村田増太郎、三隅久助等いふのと一緒で、私共は、中津の塾に行つてゐましたが、そっちをやめて、歸つて来たのです。確か明治十五年頃でございませう、だんだん話を聞いて終ひには、十四、五人位になりました。…（筆者注——三計舎の門人は）西岐波の人が、一人か二人あとは宇部です、經書が主で文章語、文章と

23) 藤本晋一（1848～1893）は長州藩永代家老福原家の家臣藤本保の子。福原家の郷校菁莪堂・維新館に入って文武の業に励んだのち、英学修業のため長崎に赴き、二十四歳の時に香港に留学する。帰国後は井上馨の推挙によってしばらく官途に就いていたと言われている。明治十年代には県会議員に選ばれ、国吉明信とともに宇部村の政治家として幾多の功績を遺した（渡辺翁記念文化協会編『復刻宇部先輩列伝』〔『大宇部』第34号・昭和14（1939）年7月15日付〕、宇部地方史研究会、1991年、83-84頁）。

いへば八家文とか、或は史記の講釋もして貰ひました、さういふやうなものばかりでした。…（筆者注——朱子学等の解釈よりも）文章の方が主であったやうに思います、お書きになったものでも、全く厳格なものばかりでありましたが、講義でも洵に厳格にして戴いてゐました。

〔紀藤織文①：師の印象は残っているかとの質問に対して〕

私はこの頃から考へて、この頃といつても、十年二十來年の考へで昔は根が内輪であるから、學者とは思はぬ、所が追々それから後に中津で學問して、歸つてつらつら考へて見るに、學者といふことが分つた。私共は中津の漢學者大久保颯山先生や、福澤諭吉先生の伯父に當る橋本鹽巖先生の塾に行つたが、先生達は有名な學者であつたけれども、どうも歸つて、つらつら考へると、その當時聞きよつたことと、文章の作り方といふやうなものが、どうもそれ以上のやうな感じがする。…（筆者注——文章の添削を受けることは）なかつた、極く簡單なものに限つて見て貰つたが、聴く一方だつた、今度遊學して歸つてからは、だんだん見て貰つた。こつちは中々學者であつたことが分らない、こつちに力がないから、分らないのだな。

このように、〔加藤亮吉①〕によると、藤田義輔は、学制發布によって新設された小学校の代用教員となつたのち、平民出身の藤田豊らの漢文の學習需要に応じていたことが窺われる。その結果として作られた三計舎は生徒が増えていたが、〔藤田豊①〕によると、藤田義輔はそこで唐宋八家文の文章を教えたり史記の講釈を行つたりしていたという。

三計舎では解釈よりも文章の方に重点が置かれていたが、〔紀藤織文①〕によると、講釈の内容と文章の方法は豊後中津の私塾で教わるよりも勝つていたらしい。ただ、藤田義輔は學者レベルの教養を持ちながらも、福原士族集團の内部では当初學者と認識されていなかった。〔加藤亮吉①〕によると、そうした密かに學者レベルに達していた一士族が、香港留学を終えた藤田晋一と提携しつつ、時勢に応じて宇部共同義会や宇部達聰会を創つていくのである。なお、加藤の藤田義輔に対する過小評価については、彼の身内に対する謙遜も考慮すべきだろう。

(3) 時勢に対応する近世的教養人

次に、藤田義輔の日常生活と指導精神に関する質問とその返答を見ていきたい。ここでとりわけ注目すべきは、藤田義輔は學者レベルの教養を持ちながら、みずからを學者とは自認していなかった点である。

〔紀藤織文②：師の日常生活はどうかとの質問に対して〕

酒も好きであったが、厳格な方ぢゃ、飲み過ぎてどうといふことは聞かなかった。西洋のことでも、詩に作ったりして、時勢に適應することをいってをられた。

〔加藤亮吉②：父の家庭生活はどうかとの質問に対して〕

非常に眞面目で、歌、音楽はまるきりやらんのです、私共には、夜御飯が濟むと、昔の英雄豪傑の話を書いて聞かせよっただけです、たゞ義太夫が好きで、子供の時に一寸習ってゐたのを、母親が怒って止めたやうですが、年を取っても義太夫だけは好きでした。…（筆者注——父には涙もろい一面があるが）義太夫は、大変忠臣義士が多いから、それだらうと思ひます。

〔紀藤織文③：師の指導精神とは何かとの質問に対して〕

徳望家といふのでせうな、自然の徳だらう。

〔加藤亮吉③：父の指導精神とは何かとの質問に対して〕

私が十一位の時に、養子に話があつて、その時でも「お前は養子に行くならば養子に行け、しかし養子が嫌ひならば、官吏になりたければ、官吏になれ、大學迄行け、大學に行くならば、哲學、法律、さういふものをやれ」そんなに書いてをりましたが、或は多少世の中の事情が分つてをったぢゃないかと思ふのです、私が十一の年ですから、明治十三年です。

〔加藤亮吉④：父の自作の詩集はないかとの質問に対して〕

それ（筆者注——父のまとまった著述）はありません、自ら學者と思つてゐないのですから。たゞ詩だけは、多少得意であつて、子供に對しても自慢してゐました。

このように、〔紀藤織文②〕によると、藤田義輔は、日常生活において時勢に適應することを意識しており、西洋に関することも漢詩で表現していたらしい。また、〔加藤亮吉②〕では、英雄豪傑や忠臣義士といった歴史上の人物の事績に共感している様子も窺われる。一方、藤田義輔の指導精神とは何かというと、〔紀藤織文③〕によると、自然の徳にもとづく徳望家としてのそれであったが、〔加藤亮吉③〕では、漢学一辺倒であつたわけではなく、大学教育における哲学や法律にも価値を置いていたようである。

こうした柔軟性ある近世的教養人の藤田義輔は、〔加藤亮吉④〕によると、作詩が得意であつ

たものの、みずからを学者と自覚することはなかったらしい。

4 紀藤宗介の生涯と教養

本章では、泊園書院出身者である紀藤閑之介の父であり、草創期における宇部共同義会、宇部達聴会を率いた紀藤宗介の生涯と教養を見ていきたい。主な史料としては、宇部市立図書館付設郷土資料館の紀藤家文書二に所蔵された『草湖藤田先生遺稿』第2巻（田中喜市、1933年）を用いた。

この遺稿集は、藤田義輔が残した多くの漢文および漢詩を宇部の岬小学校の校長を勤めた田中喜市（華城）が昭和8（1933）年から同12（1937）年にかけて整理したものであり、田中は全5巻を作って謄写板に付し、それらを同好の間に頒布したという²⁴⁾。本稿では、全5巻のうち、長編の漢文が収録された第2巻に注目し、とりわけ藤田義輔が紀藤宗介を讃えた漢文である「眠狼石記」と「周及観記」を取り上げたい。

なお、この遺稿集には、拙稿「山口県佐波郡における泊園書院出身者の事業活動の一考察——実業家尾中郁太・古谷熊三を中心に——」（『東西学術研究所紀要』第49輯、関西大学東西学術研究所、2016年、435～451頁）で取り上げた尾中郁太（鶴州）と古谷熊三（蕉雨）に贈った漢詩数点が見られ、藤田義輔が彼ら泊園書院出身者と親交があったことが窺われる²⁵⁾。

(1) 紀藤宗介の略歴

号琴峰（別号に梧の舎、万松堂主人）、名は倜則、通称宗介は天保12（1841）年11月21日に生まれた²⁶⁾。紀藤分家（実弟紀藤織文の家）の長男であったが、のちに紀藤家本家の養嗣子となる。その頃、士分の子弟は福原家の郷校菁莪堂に入って漢籍を学んだが、紀藤宗介もその例に洩れなかった。

青年期には宇部の西村友信に和歌、萩の八谷清（号枕山）に漢詩を教わり、のち熊本の菊池

24) 『草湖藤田先生遺稿』の書誌情報については、渡辺翁記念文化協会編『復刻宇部先輩列伝』〔『大宇部』第19号・昭和13（1938）年11月10日付〕（宇部地方史研究会、1991年）68-69頁の藤田義輔の伝記を参照。

25) 彼ら泊園書院出身者との親交を窺わせる漢詩（計6点）の但し書きには「初春尾中雀洲古谷蕉兩來訪蕉兩以壁上扁額花柳一園春五字為韵賦絶句五首今次其韵以却呈」「鶴州尾中氏惠園露糖賦以謝」「次尾中雀洲春訪友之韵」「尾中雀洲將赴北海道留別詩次其韵」「次尾中雀洲秋興之韵」「寄尾中雀洲 氏為余請東海先生贈古稀ノ寿詩故謝之」とある。

26) 紀藤宗介については、『米寿紀藤閑之介翁』（紀藤閑之介翁米寿祝賀記念会、1957年）の「系図」と堀雅昭『炭山の王国——渡辺祐策とその時代——』（宇部日報社、2007年）のほか、渡辺翁記念文化協会編『復刻宇部先輩列伝』〔『大宇部』第21号・昭和14（1939）年1月1日付〕（宇部地方史研究会、1991年）73-75頁を参照。

東郊と漢詩の贈答をして得るものがあつたらしい²⁷⁾。池坊流の活花も能くしたという。

文久3(1863)年七卿のうち東久世、錦小路の両公卿が宇部に逃れた際、緑が浜における練兵を見学したが、紀藤宗介は一隊の長としてこの指揮に当った。藤田義輔と同じく元治元(1864)年には禁門の変に従軍、慶応2(1866)年には四境戦争に参加する。

明治の初年には、選ばれて厚狭郡総代になって県政にも参与し、明治14(1881)年になると防長南部懇親会の主催者である藤本晋一と国吉明信から会長として担ぎ出される。同会は全国的な自由民権運動の影響を受けて、宇部近郊の旧士族階級の青年たちが春秋二度討論する場として機能した。また明治19(1886)年に創設された宇部共同義会の会長、さらに明治21(1888)年に創設された宇部達聰会の副会長に選ばれたことは、藤田義輔の略歴で示した通りである。

明治40(1907)年頃からみずからの遊園地である琴溪に万松堂を営んで移住し、遠近から訪問する雅客を迎えたので、紀藤宗介の住居はまるで宇部における高雅な趣味の中心たる観があつたらしい。大正14(1925)年2月9日に没した。

なお、宮本又郎『企業家たちの挑戦』(中央公論新社、1999年)によると、紀藤宗介は企業勃興期に新たに富豪へと成長した「企業勃興期新長者」であつた²⁸⁾。

(2) 「眠狼石記」

まず、藤田義輔が紀藤宗介を讀えた漢文「眠狼石記」〔明治12(1879)年5月作成〕を見ていきたい。ここでとりわけ注目すべきは、門地高き者の責務として貪欲に対する戒めと衆心への洞察がなされている点である。

27) 西村友信(生年未詳～1875)は幕末から明治にかけての宇部の歌人の第一人者。青年時代から庄屋を勤め、その功によって士分に取り立てられた。かつて豊後日田の広瀬淡窓の塾に入って漢籍を学び、周防の近藤芳樹に師事して国学を修め、和歌を作ることを学んだ。その後、宇部に流寓していた小倉藩士の佐久間種に就いて和歌を研究したこともあった。算数の術にも秀でていたといわれる。他人に接するには温厚で、寡言で、且つ人品の高い偉丈夫であつたことから、のちの林仙輔型の人物であつたらしい(渡辺翁記念文化協会編『復刻宇部先輩列伝』〔『大字部』第17号・昭和13(1938)年9月10日付〕、宇部地方史研究会、1991年、64-66頁)。

28) 宮本又郎『企業家たちの挑戦』(中央公論新社、1999年)の第一章第三節「幕末・明治期における企業家の栄枯盛衰」60頁の表D「明治21年(1888)長者番付(上位102名)」には、前頭クラスに「防州」の「紀藤惣助」の姓名が見える。なお、紀藤宗介と同じみずからの子弟を泊園書院に送り込んだ「伯州」の「近藤喜八郎」と「大和」の「土倉正三郎」の姓名も同クラスにおいて確認することができる。この詳細については、拙稿「泊園書院の教育と明治・大正期の実業家」(吾妻重二編著『文化交渉学のパースペクティブ—ICIS国際シンポジウム論文集—』関西大学東西学術研究所研究叢刊52、関西大学出版部、2016年)329-352頁を参照。

紀藤琴峰子蓄一石几案間物也。其形如獸之蹲踞左顧者也。子曾遊于綠濱見沙際有小石。僅露其頂拳之則竒石也。携而歸矣。①常置几上愛之乃命曰眠狼。徒非以其形之類似而命名也。盖有寓意存焉。會有客議之曰。②狼之為性獠惡而貪饑。加之以眠則所謂飽食逸居者。而君子之所不與也。而子愛玩之不祥或莫大焉歟。請改稱乃可而耳。琴峰子微笑徐答曰。子之言也善矣。然知其一而未知其二也。因語以寓意之所在客唯々而退矣。既而子謁余曰。眠狼之稱世人多不解。吾意者不獨容也。他日或又有議之者歟。吾甚煩其辯。請片言記其由以代言辭。遂言而悉意中矣。其言曰。夫狼我邦獸中之尤猛者。橫行深山幽谷間。始得逞其慾。而莫能害之者也。若負其勇以彷徨村里。輒為人所殺獲矣。③此不自省故也。抑人之處世亦然歟。④凡門地高則驕心易生。宗族盈則凌傲忘己。至不知其所底止。而後衆心背馳百事困蹶。悔何迨猶狼負其勇彷徨村里也。愚亦甚矣。今夫石象獸困眠一室中。是亦離山谷而出海濱以非蒙吾掌握之厄乎。可不深鑒焉哉。然則眠之為言非逸居安眠。而羈縻困睡不得其處之謂也。⑤由之觀是則琴峰子之居常處己接人。正心翼翼恒其德可知也。且詩有狼跋之章。以比周公遠近有難。而不失其聖焉。子之命石亦如此歟。取捨採擇實在其人耳。何拘偏見之為語。曰少所見多所怪。即客之謂歟。於是乎眠狼之石出處以之始終。以之何妨焉。猶諸銘几案間也。豈唯玩物之謂乎。

このように、紀藤宗介は海浜で見つけた珍しい石を持ち帰り、みずからの机の上に留めていたが、この石に「眠狼」と名づけ、その形に適さない命名を行なったという（下線①）。

ある日、客人がこう非難した。「狼」の性質は凶悪で貪欲ですが、これに「眠」を加えると、いわゆる「飽食逸居者」となってしまいますよ、と（下線②）。

そこで紀藤宗介は、みずからの命名が世間で許容されず、後々これを非難する者も出てくると考え、藤田義輔にその弁解を記してくれるよう依頼した。

その弁解で言うには、そもそも狼は人里離れた山や谷を横行することでその欲望を満たすことができるが、もし勇気に頼って村里をさまよい歩いたならば、人に殺し獲られてしまう、と。そして、これは自省しないからだ、と指摘する（下線③）。

人の処世も同様である。門地が高く一族が満ちれば驕心が生じて自己を見失い、やがては衆心が離れて百事が困窮してしまう（下線④）。そのため紀藤宗介は、この石についても、山や谷を離れたために捕らえられ、苦しい眠りに繋がれているものと考えている。

以上のように、藤田義輔は紀藤宗介の言行を振り返り、彼は常に己を処して人に接し、心を順序正しく整えているし、『詩経』の幽風篇の狼跋章には、狼に擬えられた周公は周囲からの反論があっても、その聖人たるを失わなかったといわれるが、彼の命名も実にそのようであった、

と讃えるに至る（下線⑤）²⁹⁾。

(3) 「周及観記」

次に、藤田義輔が紀藤宗介を讃えた漢文「周及観記」〔明治4（1871）年以降作成〕を見ていきたい。ここでとりわけ注目すべきは、豪族たる者の責務として快樂に対する戒めと万物への洞察がなされている点である。

①營華屋起高楼宴安遊観。以資于一時之快者。世間滔々皆是。而同紀藤琴峰君今茲改造居室。上層有高観詢名于余。②其志盖與世人異而在自省且戒子孫。余曰周及哉。易曰風行地上観。先王以省方観民設教。傳曰風行地上周及庶物。③嗚呼観之義大之可以施天下。小之可以治一家。今観象玩辭以命名。雖不中不遠矣。君其縣内之豪族也。借婢實以十数焉。此故處世之闇必也。有餒氣之時乎。輒登臨以観萬象之動靜。遠則豐嶺周海雲烟波濤之出沒起伏。近則郊田丘林春秋霜露之發榮凋枯。觸景接物以艱氣澄神於此乎。心目清豁當有大所得也。④而後施諸修身齊家之上宜矣。家道整完周及無遺焉。猶風行地上也。况又用舊屋之古材兩三。以表不忘本之衷誠。其崇祖先戒後昆之意至矣。盡矣。然則其志果與世人異而非宴安遊観之為也。⑤今子今孫時々登者。静観沈思不負命名之義。則庶幾于承順家訓之本志也哉。

このように、藤田義輔はまず、世間では華やかな住居や高く立派な建物を建てることを一時の快樂としているという（下線①）。そして紀藤宗介も住宅の上層に高楼を造り、その命名を求めてきたらしい。そこで藤田義輔はこう思う。紀藤宗介の望みは自省しつつ子孫を戒めることにあるのだろう、と（下線②）。

さて、その命名は「周及」であった。『易経』の上経の観卦に言うには、「風行地上観。先王以省方観民設教（観の卦は風が地の上にある。昔の聖王はこの卦に法とって、四方を巡視し、民の風俗を観察し、それぞれに適した政教を設ける）」と³⁰⁾。また程頤『易伝』に言うには、「風

29) 『詩経』の当該章には、「狼跋其胡、載蹇其尾。公孫碩膚、赤舄几几。狼蹇其尾、載跋其胡。公孫碩膚、德音不瑕」とあり、『毛序』によると、「狼跋は、周公を美するなり。周公、政を撰し、遠くは則ち四国流言し、近くは則ち王知らず。周の大夫、其の聖を失はざるを美するなり」とする（石川忠久『詩経』中、明治書院、1998年、155-158頁）。

30) 『易経』の当該卦には、「象曰。風行地上観。先王以省方観民設教」とある（本田濟『易』、朝日新聞出版、2017年、199頁）。

行地上周及庶物（風が地上を吹くとき、あまねく万物にゆきわたる）」と³¹⁾。そのため、この「観」の意味を大きくすれば天下に施すことができ、小さくすれば一家を治めることができるという（下線③）。

藤田義輔の考えはこうである。県内の豪族である紀藤宗介は陰悪な気分になる時もあるだろうが、高樓に登って自然界一切の動静を観察すれば、心と目が清らかになるだろうよ、と。そして、この「周及」を修身齊家に施せば、家を治める道が完全なものとなり、遺すものはないまでにゆきわたるのだ、と指摘する（下線④）。

以上のように、藤田義輔は紀藤宗介の望みを代弁するのであるが、紀藤宗介の子や孫（すなわち閑之介ら）が冷静に物事を観察して熟考しており、「周及」の意味を裏切っていないので、紀藤家の家訓の本来の願いに従っているのだなあ、と讃えるに至る（下線⑤）。

おわりに

本稿では、近代における泊園書院出身者の事業活動の一事例として、山口県宇部地域の名望家、すなわち林仙輔、村田増太郎、紀藤閑之介、加藤亮吉に注目し、彼らの略歴および企業家渡辺祐策との共同事業を明らかにしつつ、渡辺を含めた彼らの活動に対して思想と制度の両面で影響を与え続けたと考えられる彼らの父親の言動に注目した。

彼らは長州藩永代家老福原家の家臣の子弟として文久期もしくは明治初年に生まれた。ただし彼らは先祖代々武士であったわけではない。林家と紀藤家はもともと医者を勤めていたし、加藤家に至っては元商人であった。何らかの才覚によって士分となった彼らの先祖は尊皇に篤かったのだろうか、林家と加藤家では七卿落ちに際し自邸を提供している。

林を除く彼らは岩国の東澤瀉塾と大阪の泊園書院の両方で学んだ。その後、村田は東京の和仏法律学校、紀藤は大阪の大学分校予科から転じて京都の第三高等中学校、加藤は大阪の府立中学校をへて東京の帝国大学法科大学にそれぞれ進学した。林の場合、大阪で中等教育を受けたものの、泊園書院が最も印象深かったのだろうか、彼の伝記には泊園書院を辞する時に南岳から訓戒の語をもらったことまで記されている。

彼らの帰郷は進学や就職によってばらつきがあるが明治期までになされ、その後は宇部地域の村会議員や村長、市制施行後は市会議員や市長を歴任するなど、地方自治に勤めた。林の場合、宇部村初の衆議院議員として国政にも関与している。実業面では、第2章の表で示したよ

31) 『易伝』の当該卦の注釈には、「風行地上。周及庶物。爲由歴周覽之象。故先王旰之。爲省方之礼。以觀民俗而設政教也」とある（程頤撰『易程傳』二、中華書房、1985年、103頁）。

うに、宇部興産創業者の渡辺祐策と数多くの共同事業を手掛けている。その中には、宇部興産の母体となった四社、すなわち沖ノ山炭鉱、宇部窒素工業、宇部セメント製造、宇部新川鉄工所も含まれる。しかし、その事業熱は警察署、郵便局、橋梁、学校の設置にも及んでおり、彼らは営利追求だけを目標とする実業家ではなかったことが窺われる。

こうした彼らの名望家としての活動を支えた組織ないしは制度には、宇部共同義会、一致会、宇部達聴会といったものがあり、その草創期を初代会長や顧問格として率いたのは加藤と紀藤の父親である藤田義輔と紀藤宗介であった。

藤田義輔と紀藤宗介はともに禁門の変と四境戦争を戦い抜いた福原士族である。維新後には、藤田義輔の場合、平民からの漢文学習需要に応じつつ、西洋のことで漢詩で表現するなど、柔軟性ある近世的教養人として福原士族集団の内部で一目置かれ、紀藤宗介の場合、治者の責務として貪欲や快樂を戒める考えを持ちつつ、それと同時に衆心と万物への洞察がなされていた。紀藤宗介のこの意識は儒教古典を通じて藤田義輔と共有されていたものといえるだろう。この両者が香港留学帰りの藤本晋一と連携しつつ、上記の三組織を創設したのである。

以上のように、彼ら泊園書院出身者の活動に対して思想と制度の両面で影響を与え続けたと考えられる彼らの父親の言動を見ると、とりわけ治者の責務として自己の貪欲や快樂を戒めつつ、維新後に到来した新たな社会（四民平等の達成）や新たな学問（自然科学の流入）の状況に対応していく様子が窺われる。こうした状況対応は、西洋由来の文明観を背景として儒教古典を再解釈した結果の産物であったと思われるが、藤田義輔のような実質的に学者でありながら自分も周囲もそれを自覚しない〈実務家〉であったからこそ、そう解釈することが容易であったのかもしれない。また、彼らが共有した倫理は公共的かつ社会的な企業家としての投資行動を導き出し、宇部の工業化ないしは都市化を促進する面があったのではないだろうか。

いずれにしても、明治期の漢学と企業家の性格には何らかの因果関係があると思われるが、本稿で取り上げた泊園書院出身者の恩師である東澤瀉と藤澤南岳の思想との関わりの考察も含め、今後もその解明を続けていきたい³²⁾。

※本稿は、科学研究費助成事業若手研究（B）「大阪漢学と近代企業家に関する研究——泊園書院と重建懐徳堂を中心として」（課題番号17K18250、横山俊一郎研究代表）における成果の一部である。

32) 紀藤（閑之介）は東澤瀉塾に在塾中はそれ程でもなかったが、歳を重ねるにつれて東澤瀉の偉大さを知り感化され、やがては自分の一生を支配していたという（『米寿紀藤閑之介翁』、紀藤閑之介翁米寿祝賀記念会、1957年、28-29頁）。

